

〔燕石雜誌〕物の名

鼻ははじめなりといへり、物のはじめを鼻祖といふ、又端も又首ヘシなり、

〔めのとのさうし〕はなは人の顔のうちにさし出てたかく、めにたつものにて候、あひかまへてあひかまへてしろくおんけはひ候まじく候、さし出て見にくき物にて候、

〔身のかたみ〕第五、御鼻は顔のうちのぐに、とりわきさしいりに、めにたつものにて候、けしやうのうちにて、御心をそへられ候へ、こくまろくあそばされ候な、よのところよりは、ちと薄く御けはひ候べく候、

〔日本書紀神代〕一書曰、略中已而且降之間、先驅者還白、有一神居天、八達之衢、其鼻長七咫、背長七尺餘、當言七尋、且口尻明耀、眼如八咫鏡、而粲然似赤酸醬也、

〔續日本後紀仁明〕承和十年十二月癸未、元興寺傳燈大法師守印卒、和泉國人、略中六根之中、鼻根最奇、守印他去間、有人入其房、守印歸來問之云、向來何人入吾房、又見童子云、汝食其飯、驗之知實焉、鼻之遙聞、皆此類也、

〔百練抄一四〕長保五年八月二日、雙六采入第二内親王鼻内、僧慶圓加持之出之給度者、

〔今昔物語二八〕池尾禪珍内供鼻語第二十

今昔、池ノ尾ト云フ所ニ、禪珍内供ト云フ僧住キ、身淨クテ眞言ナド吉ク習テ、懃ニ行法ヲ修シテ有ケレバ、池ノ尾ノ堂塔僧房ナド露惹タル所无ク、常燈佛聖ナドモ不施ズシテ、折節ノ僧供寺ノ講説ナド滋ク行ハセケレバ、寺ノ内ニ僧坊隙マ无ク住賑ハヒケリ、湯屋ニハ寺ノ僧共湯ヲ不涌サ、又日无クシテ、浴嚙ケレバ賑ハ、シク見ユ、此ク榮ユル寺ナレバ、其ノ邊ニ住ム小家共員數出來テ郷モ賑ハヒケリ、然テ此ノ内供ハ鼻ノ長カリケル五六寸許也ケレバ、領ヨリ下テナム見エケル、色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ様ニシテツブ立テツ黈タリケル、其レガ極ク痒カリケ